

ラオ語ルアンパバーン方言の音韻体系

Phonological System of Luangphabang Dialect in Lao

鈴木 玲子

Reiko Suzuki

東京外国語大学総合国際学研究院

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨

本稿で述べる「ルアンパバーン方言」とは、ラオス人民民主共和国（以下「ラオス」）の首都ビエンチャンより直線にして、北西約 215km に位置するルアンパバーン県ルアンパバーン郡ナービエンカム村で話されているラオ語のことである。本稿の目的は、このルアンパバーン方言の音韻体系と音声学的特徴を記述することにある。ルアンパバーン方言の音韻体系で特筆すべきことは、子音結合を有する、母音結合として/aʊ/を有する、そしていくつかの音素の音声学的特徴がビエンチャン方言と大きく異なっている、という点である。音韻体系や音声学的特徴を正書法とも関連付けて検討すると、一部は北タイ方言やシャン語と特徴が類似しているが、総体的にみてルアンパバーン方言はラオ語の一種であるということが出来る。

“Luangphabang dialect” in this paper is one kind of Lao language spoken at Naviengkham village, Luagphabang district, Luagphabang prefecture, located about 215 km northwest from Vientiane capital, Lao People’s Democratic Republic. The purpose of this paper is to describe the phonological system and phonetic features of this Luangphabang dialect. A distinctive features of the phonological system of Luangphabang dialect is that it has some consonant clusters and vowel /aʊ/ as a diphthong, and some phonetic features of each phoneme are very different from Vientiane dialect. Considering the phonological system and phonetic features in relation to orthography, some features are similar to those of Northern Thai dialect or Shan, overall, it can be said that Luangphabang dialect is a one type of Lao language.

キーワード：ラオ語，音韻体系，音声学的特徴，ラオ語方言

Keywords: Lao language, phonological system, phonetic feature, Lao dialect



はじめに

本稿の目的は、ラオ語ルアンパバーン方言の音韻体系と音声学的特徴を記述することにある^{1,2}。ラオ語諸方言に関する報告は、首都ビエンチャンのラオ語（以下「ビエンチャン方言」）を除いては皆無に等しい。本稿のルアンパバーン方言についても声調体系など、部分的な報告（Burusphat (2000)）はあるものの、音韻体系の全体を詳述したものは存在しない。当該方言の先行研究が存在しないため、必要に応じてビエンチャン方言や近隣地域に分布する北タイ方言、シャン語や標準タイ語との異同についても言及しながら検討していくことにする。なお、本稿で述べる「ルアンパバーン方言」とは、東南アジア大陸部に位置するラオス人民民主共和国（以下「ラオス」）の首都ビエンチャンより直線にして、北西約 215km に位置するルアンパバーン県ルアンパバーン郡ナービエンカム村で話されているラオ語のことである。

本稿の資料は、1997 年、同県同郡ナービエンカム村に生まれ、2015 年大学進学のためにビエンチャン都に居住、その後 2018 年から 2019 年の 10 ヶ月間、日本に在住した T 氏（女性）に対して、2019 年 1 月から 5 月にかけて調査を行った資料にもとづいている。また、2019 年 8 月に T 氏の母親である B 氏にも補足的調査をルアンパバーンで行った。B 氏は、1972 年ルアンパバーン県ルアンパバーン郡ビエンケオ村生まれの同村育ちで、2006 年婚姻後、隣村のナービエンカム村に居住している³。T 氏、B 氏、そしてナービエンカム村出身の T 氏の父親もラオ族である⁴。

I. 音節構造

ルアンパバーン方言は、基本的には単音節声調言語である。音節は、頭子音を C1、ただし子音結合の場合は C1C3、母音を短母音は V、長母音あるいは二重母音は VV、末子音を C2、声調を T とすると、次のように書き表せる。なお、() は任意、/T は音節全体に声調がかかるという意味である。

C1(C3)VV(C2)/T または C1VC2/T

母音が短母音であるときは末子音を必ず伴う点についてはビエンチャン方言と同じであるが、頭子音結合 C1C3 を有するという点でビエンチャン方言と異なる。ただし、頭子音結合 C3 に立ちうる子音は非常に限定的で、語彙数も少ない（後述 II. 4）。以下に各音節構造の例を一つずつ示す。

1. C1VV/T /khāa/ 「脚」
2. C1VVC2/T /khāay/ 「売る」

3. C1C3VV/T /khwāa/ 「右」
 4. C1C3VVC2/T /khwāaŋ/ 「遮る」
 5. C1VC2/T /khāy/ 「開ける」

II. 子音

1. 音素目録

子音音素は 20 である。これらは全て頭子音の位置に立ちうる。以下に音素一覧を示す。

	両唇音	唇歯音	歯裏音/歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
無声無気閉鎖音	p		t	c	k	ʔ
無声有気閉鎖音	ph		th		kh	
有声閉鎖音	b		d			
鼻音	m		n	ɲ	ŋ	
摩擦音		f	s			h
両側音			l			
接近音	w			y		

2. 頭子音の音声学的特徴

各頭子音音素の音声学的特徴は下記のとおりである。

(1) 無声無気閉鎖音

/p, t, c, k, ʔ/は硬音で、閉鎖がかたく、破裂も急激である。

/p/: [p] 両唇の無声無気閉鎖音。例：/pǎa/[pa:15] 「魚」

/t/: [t] 歯裏から歯茎の無声無気閉鎖音。例：/tǎa/[ta:15] 「目」

/c/: [c] [tɕ] 硬口蓋あるいは歯茎硬口蓋の無声無気閉鎖音。破擦音が自由変異的に現れる。例：/cǎam/[ca:m15]~[tɕa:m15] 「くしゃみ」

特に母音/i, ii//ɔ, ɔɔ/の前では常に破擦音になる。このことを次のように表すこととする。破擦音/c/→[tɕ]_i 例：[tɕei:31] 「(焦げ目をつけるように) 焼く」

/k/: [k] 軟口蓋の無声無気閉鎖音。高舌母音/i, u, uu/のあとでは後ろ寄りの軟口蓋音となる。例：/kǎa/[ka:15] 「カラス」

/ʔ/: [ʔ] 声門閉鎖音。例：/ʔǎa/[ʔa:15] 「父方叔母」

(2) 無声有気閉鎖音

/ph, th, kh/はいずれも軟音であるが、ビエンチャン方言よりも気音が強い。/ph/も/th/も弱い破擦音[pʰ][tʰ]になることがある。また、/kh/の異音[x]はビエンチャン方言にはない。

/ph/: [pʰ][pʰ] 両唇の無声有気閉鎖音。例：/phâa/[pʰa:52]～[pʰfa:52]「布」

/th/: [tʰ][tʰ] 歯茎から歯裏の無声有気閉鎖音。例：/thâa/[tʰa:52]～[tʰsa:52]「待つ」

/kh/: [kʰ][x] 軟口蓋の無声無気閉鎖音。摩擦が強めである。自由変異的に摩擦音になることがある。例：/khâa/[kʰa:52]～[xa:52]「殺す」

(3) 有声閉鎖音（入破音）

/b, d/いずれも硬音である。ビエンチャン方言と異なり、入破音や前鼻音化音として実現することが多い（後述VI）。また、/d/の異音[l]はビエンチャン方言にはない。

/b/: [β][β] 両唇の有声閉鎖音。ほとんどの場合入破音である。

例：/bïi/ [βi:15]～[βi:15]「肝臓」

[^{mb}b] 母音/a, aaの前では常に前鼻音化閉鎖音か、入破音になる。前鼻音化音/b/→[^{mb}b]_a,aa, または入破音/b/→[β]_a,aa, 例：/bâa/[^{mb}ba:31]～[βa:31]「肩」

/d/: [d][d] 歯茎から歯裏の有声閉鎖音。ほとんどの場合入破音である。

例：/dék/ [dekʰ34]～[dekʰ34]「子供」

[ndd] 母音/a, aaの前では常に前鼻音化閉鎖音か、入破音になる。前鼻音化音/d/→[ndd]_a,aa, または入破音/d/→[d]_a,aa 例：/dâa/[ndda:31]～[da:31]「ののしる」。

[l] 自由変異的に[l]が現れることもある。特に母音が/i/のときである。

例：/dïi/[di:15]～[li:15]「よい」

(4) 鼻音

ビエンチャン方言と異なり、無声化や出だしにわずかに前無声化音を伴うことがある⁵（後述VI）。また、/m, n, ɲ, ŋ/いずれも解放の際、弱い反響音が聞こえることがある。/ɲ/の異音[y]はビエンチャン方言にはない。

/m/: [m] 両唇の鼻音。例：/măa/[ma:15]「来る」。

[m̥][^{mb}m] 自由変異的に現れる。例：/măa/[m̥a:534]～[^{mb}ma:534]「犬」

/n/: [n] 歯茎の鼻音。例：/năa/[na:15]「田」。

[n̥][^{nb}n] 自由変異的に現れる。例：/năa/[n̥ã:534]～[^{nb}nã:534]「厚い」

/ɲ/: [ɲ] 硬口蓋の鼻音。例：/ɲăa/[ɲa:15]「～さま（尊称）」

[ɲ̥][^{nb}ɲ] 自由変異的に現れる。例：/ɲăa/[ɲ̥a:52]～[^{nb}ɲa:52]「草」

[y] 自由変異的に現れる。特に広母音の前のとき、[y]になることが多い。

例：/ɲôo/[yo:52]「短縮する」、/ɲát/[yatʰ34]「詰め込む」

/ŋ/: [ŋ] 軟口蓋の鼻音。例：/ŋǎa/[ŋa:15]「象牙」
[ʔŋ] 自由変異的に現れる。例：/ŋǎay/[ŋa:i534]~[ʔŋa:i534]「仰向けになる」

(5) 摩擦音

ビエンチャン方言と同様に摩擦はいずれもやや強めである。

/f/: [f] 下唇の後面と前歯の前面の先との間の唇歯の摩擦音。

例：/fǎa/[fa:34]「空」

/s/: [s] 前寄り歯茎の摩擦音。例：/sǎa/[sa:34]「遅い」

[s̺] 母音/i, ii/の前ときは常に歯裏の摩擦音になる。歯裏の摩擦音/s/→[s̺]_i,ii,

例：/sǐi/[s̺i:534]「色」

/h/: [h] 声門の摩擦音。後続母音を鼻音化する。例；/hǎa/[hǎ:52]「5」

母音/i, ii/の前では常に硬口蓋の摩擦音に、母音/u, uu/の前では両唇の摩擦音になる。

/h/→[ç]_i, 例：/hǐin/[çi:n534]「石」, /h/→[ϕ]_u 例：/hǔu/[ϕũ:534]「耳」

(6) 両側音

/l/: [l] [r] 歯茎の両側音。自由変異的に歯茎のたたき音[r]が現れることがある。

例：/lǔum/[lu:m15]~[ru:m15]「忘れる」

(7) 接近音

いずれもビエンチャン方言より強めの摩擦を伴う。

/w/: [w] [ʷw] 両唇の接近音。ただし唇の突き出しはなく、丸めるだけである。前無声化音を伴い、後続母音を鼻音化することもある。

例；/wǎt/[wat'31]「寺」 /wǎay/[wa:i534]~[ʷwǎ:i534]「籐」

[v] 自由異的に唇歯の有声摩擦音が現れる。特に母音/i, ii/の前では唇歯の有声摩擦音となる。/w/→[v]_i,ii, 例：/wǐi/[vi:15]「扇子」

/y/: [j] [j̺] 硬口蓋の接近音。まれに自由変異的に硬口蓋の摩擦音が表れることがある。

例：/yǎan/[ja:n34]~[j̺a:n34]「恐れる」

[ʔj] 前無声鼻音化音が自由変異的に表れることがある。

例：/yǎay/[ʔja:i15]「配る」

3. 末子音の音声学的特徴

先の1で挙げた子音音素のうち、末子音として位置し得る子音は/p, t, k, ʔ, m, n, ŋ, w, y/の9つである。これらのうち、/p, t, k, ʔ/は破裂しない内破音である。また、接近音/w, y/は音節主核的ではなく音声学的には母音として実現するので、ここでは接近音(半母音)

と記述する。

- /p:[pʰ] 破裂しない両唇の閉鎖音。例：/sàp/[sápʰ31]「財産」
 /t:[tʰ] 破裂しない歯茎閉鎖音。例：/sàt/[sátʰ31]「(ダーツを)投げる」
 /k:[kʰ] 破裂しない軟口蓋閉鎖音。例：/sàk/[sákʰ31]「洗濯する」
 /ʔ:[ʔʰ] 破裂しない声門閉鎖音。例：/sàʔ/[saʔʰ31]「散らかる」
 /m:[m] 両唇の有声閉鎖音。例：/sàm/[sam31]「等しい」
 /n:[n] 歯茎の有声閉鎖音。例：/sàn/[san31]「震える」
 /ŋ:[ŋ] 軟口蓋の有声閉鎖音。例：/sàŋ/[saŋ31]「命ずる」
 /w:[w] 両唇の接近音（半母音）。例：/sàw/[saw31]「賃貸する」
 /y:[j] 硬口蓋の接近音（半母音）。例：/sây/[saj52]「腸」⁶

4. 子音結合

ルアンパバーン方言には、ビエンチャン方言に存在しない子音結合がある。それらは /kw//khw//thw//sw//ŋw//hw/⁷ である。このように第二子音は全て /w/ で、その種類は限定的である。実在する語彙も非常に少なく、確認できた語彙の母音はいずれも /a/ か /aa/ である。自由変異的に第一子音と第二子音との間に [u] が現れることもある。以下に一つずつ例を示す。その際、単音節語については単独頭子音との対立例を示してその存在を証明する。

- | | | |
|--|-----|---------------------------------------|
| /kwǎaŋ/ [kwa:ŋ15] 「シカ」 | vs. | /kǎaŋ/ [ka:ŋ15] 「中央」 |
| /khwǎn/ [kʰwan15] 「煙」 | vs. | /khǎn/ [kʰan15] 「もし」 |
| /thwǎay/ [tʰwa:ɿ15] 「(謎を)あてる」 | vs. | /tháay/ [tʰa:ɿ34] 「最後・末」 ⁸ |
| /swǎay/ [swa:ɿ534] 「遅れる」 | vs. | /sǎay/ [sa:ɿ534] 「線・路」 |
| /ŋǒm ŋwǎay/ [ŋom11 ŋwǎ:ɿ15] ⁹ | | 「曖昧だ・不明瞭だ」 |
| /hǒn hwǎay/ [hon53 hwǎ:ɿ534] | | 「うんざりする」 |

上記以外は、正書法上では子音字連続形式があっても、実際の発音ではビエンチャン方言と同様に、1) 第2子音の /w/ が脱落している、2) /w/ を表す第2子音と /a/ か /aa/ を表す後続母音の部分が /ua/ と実現される、のどちらかで子音結合ではない（後述VI）。

III. 母音

1. 母音音素

基本母音音素は9。全ての母音音素に長母音短母音の対立を有する。また、二重母音は4つである。以下に音素一覧を示す。

(1) 基本母音

ii, i		uuu, u, uu, u
ee, e	əə, ə	oo, o
εε, ε	aa, a	ɔɔ, ɔ

(2) 二重母音

ia	ua	ua	au
----	----	----	----

特筆すべき点は、ビエンチャン方言にはない二重母音/au/を有する点である。近隣言語である北タイ方言にも存在しない母音結合であるが、その西の北ミャンマーに分布するシャン語には/au/が存在することを付記しておく¹⁰。

2. 母音の音声学的特徴

各母音音素の音声学的特徴は下記のとおりである。

(1) 基本母音

/u, uuu/と/ə, əə/の両者の舌の位置がビエンチャン方言ほど接近していないため、聞き分けが容易である。しかし/e, ee/と/o, oo/の舌の高さがやや高めで、それぞれ/i, ii/と/u, uu/に接近しており、聞き分けが難しいという点は同じである。

/i, ii/ 張唇の前舌狭母音[i][i:]。[i:]の方が[i]よりも舌の高さがやや高い。

例：/sít/[sit³⁴]「権利」 /sít/[si:t³⁴]「青ざめる・色落ちする」

/e, ee/ 張唇の前舌半狭母音で、舌の高さはやや高めの[e][e:]。

例：/hét/[hət³⁴]「キノコ」 /hêt/[hɛ:t⁵²]「原因」

/ε, εε/ 張唇の前舌半広母音[ε][ε:]。[ε:]の方が[ε]よりも舌の高さがやや高い。

例：/tét/[tɛt³⁴]「蹴る」 /têk/[tɛ:k⁵²]「割れる」

/a, aa/ やや前寄りの中舌広母音[a][a:]。[a:]の方が[a]よりも舌の高さがやや高い。

例：/phák/[p^hak³⁴]「野菜」 /pháak/[p^ha:k³⁴]「部分」

/ə, əə/ 弛唇の中舌半狭母音[ə][ə:]

例：/hôn/[hôn⁵³⁴]「永い」 /hôn/[hôn⁵³⁴]「飛ぶ・飛行する」

/u, uuu/ 弛唇のやや後舌で狭母音[u][u:]か、半狭母音[ɯ][ɯ:]。

例：/khûn/[k^hu:n⁵²]～[k^hɯ:n⁵²]「上がる」 /khûun/[k^hu:n⁵²]～[k^hɯ:n⁵²]「波」

/u, uu/ 円唇の後舌狭母音[u][u:]。両唇を丸く突き出すのではなく、下顎を緊張させてすぼめる。[u:]の方が[u]よりも円唇化が強い。

例：/sút/[sut³⁴]「最後・末」 /súut/[su:t³⁴]「(スープを)吸う」

/o, oo/ 円唇の後舌半狭母音で、舌の高さはやや高めの[o][o:]

例：/kôn/[kɔn¹⁵]「手品・惑わす」 /koon/[kɔ:n¹⁵]「いびき・樹洞」

/ɔ, ɔɔ/ 円唇の後舌半広母音[ɔ][ɔ:]。

例：/mɔʔ/[^mmɔʔ34]「適切だ」 /mɔt/[mɔ:t³⁴]「消す」

(2) 二重母音

/ia, ua, ua, au/のいずれも第一母音が若干長めで、第二母音は弛唇の中舌半狭母音の[ɔ]を添えるような音になる。順に[i:ɔ] [u:ɔ] [u:ɔ] [a:ɔ]。

例：/sia/[si:ɔ534]「失う」 /sua/[su:ɔ534]「トラ」
 /sua/[su:ɔ31]「悪」 /sau/[sa:ɔ534]「どこ」

二重母音/au/については現在の正書法から考えると、ルアンパバーン方言では正書法でも/ay/と/au/の対立をそれぞれ「ɿ」と「ʔ」という別の字形で表しており、発音と文字が対応しているということできる（後述VI）。一方のビエンチャン方言の正書法では、「ɿ」と「ʔ」両者とも/ay/という音価を表す。これはもともと別の音価であったが、全て/ay/に合流させてしまったためであると考えられる。

3. 韻表

次章IVで述べるが、各音節における声調を記述する場合、タイ(Tai)系言語では、母音と末子音の共起環境が声調を決定する要因となっている。この「音節主核母音+末子音」¹¹の単位を「韻(rhyme)」と呼ぶが、声調の記述に先立ち、筆者自身の資料からルアンパバーン方言の韻として認められるもの¹²を下表に挙げる。ただし、オノマトペや感嘆詞は本来のラオ語の語彙としてよいのか判断がつかないものが多い。そのような語彙の韻は、下表では「△」として挙げておくことにする。韻の特徴は以下のとおりである。

- ①長母音のとき、末子音/ʔ/との韻はない。
- ②短母音のとき、ゼロ末子音の韻、すなわち開音節はない。
- ②/a, aa/を除く中舌母音、および後舌母音と末子音/w/の韻はない。
- ③前舌母音と末子音/y/の韻はない。
- ④二重母音/au/はいずれの末子音とも結合しない。

表1：韻表（「○」は有、「×」は無、「△」はオノマトペ・感嘆詞の類）

	平 韻						促 韻			
	ゼロ	-m	-n	-ŋ	-w	-y	-ʔ	-p	-t	-k
-ii	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○
-ee	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○
-εε	○	○	○	○	○	×	×	○	○	○
-aa	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○

-əə	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○
-uuu	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○
-uu	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○
-oo	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○
-ɔɔ	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○
-i	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○
-e	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○
-ɛ	×	△	△	△	×	×	○	△	○	△
-a	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○
-ə	×	×	○	○	×	×	○	×	○	○
-uu	×	○	○	○	×	×	○	○	○	○
-u	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○
-o	×	○	○	○	×	×	○	○	○	○
-ɔ	×	△	×	△	×	×	○	△	△	△
-uaa	○	○	○	○	×	○	△	○	○	○
-ua	○	○	○	○	×	○	○ ¹³	○	○	○
-ia	○	○	○	○	○	×	△	○	○	○
-auu	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×

IV. 声調

1. 声調体系

基本的な声調体系は5声調体系である。それは次の5つである。なお、声調の調値を最高域を5、最低域を1とした5段階表記で表すことにする。図1はその調値の実現曲線を表した図である。

- ①/ ˘ / 中降調 /khàa/ [k^ha:31] カー(生姜の一種)
- ②/ ˆ / 下降調 /khâa/ [k^ha:52] 殺す
- ③/ ˘ / 中昇調 /kháa/ [k^ha:34-45] 商う
- ④/ ˇ / 上昇調 /khǎa/ [k^ha:15] ひっかかる
- ⑤/ ~ / 高降昇調 /khāa/ [k^ha:534] 脚

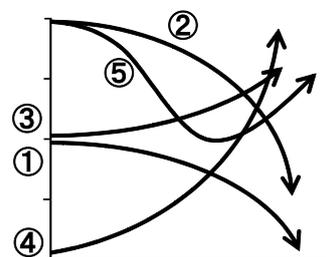


図1：声調の高さカーブ

前章(Ⅲ.3)で述べたが、タイ(Tai)系言語の声調は、韻のタイプによって声調の現れ方が異なる。ルアンパバーン方言も他のタイ(Tai)系言語と同様に韻は「平韻」、すなわち「平音節」と「促韻」、すなわち「促音節」のタイプがある。平音節とは音節末に

末子音を伴わない長母音か二重母音、あるいは末子音が/m, n, ŋ, w, y/で終わっている音節で、促音節とは末子音が/p, t, k, ʔ/で終わっている音節のことである。

平音節では上記5声調全てが対立している。一方、促音節では次に示すように主核母音が長母音か二重母音である場合と短母音である場合で実現する声調素が異なる対立を示す。具体的には次の声調が対立する。

長母音・二重母音の促音節	短母音の促音節
②/ ˆ / 下降調	①/ ˘ / 中降調
③/ ˘ / 中昇調	③/ ˘ / 中昇調

2. 各声調について

(1) 平音節の声調

①/ ˘ / 中降調：中域に始まり、低域あたりまでゆるやかに下降する [31]。休止の前では、音節末尾に喉頭の緊張を伴うことが多い。¹⁴

例：/phàa/[p^ha:31]「(大きなものを) 割る」

②/ ˆ / 下降調：高域から次低域まで下降する[52]。

例：/phâa/[p^ha:52]「布」

③/ ˘ / 中昇調：中域かやや高めに始まり、次高域まで少し上昇する[34]ないし[45]。

例：/pháa/[p^ha:34]「斧」

④/ ˇ / 上昇調：低域に始まり、高域あたりまでゆるやかに上昇する[15]。ただし決り目なしに後続音節が続く環境では、ほぼ低平調[11]である。¹⁵

例：/phãa/[p^ha:15]「連行する」 /phãapăy/[p^ha:11 paj15]「連れて行く」

⑤/ ~ / 下降中昇調：高域に始まり、中域まで下がりそしてまた次高域まで少し上昇する[534]。

例：/phãa/[p^ha:534]「岩」

ビエンチャン方言との違いは、最も自然、且つ初期設定的な抑揚で、発話エネルギーも少なく済む「中平調」がないという点である。一方で声調⑤の「中域まで下がりそしてまた次高域まで少し上昇」という複雑なピッチカーブを有する声調があることも独特である。

(2) 促音節の声調

促音節の声調は、なかでも母音が短母音のときは、声調の持続時間が非常に短いことから平音節のそれとは全く同じ調値を有するわけではない。しかしながら、同じ音節構造の条件で対立するわけではなく、音節構造の違いによる条件異音と解釈できるため、異なる声調素を立てることは余剰的である。したがって、促音節の声調は、平音節にお

いて類似した音調を有する声調の条件異音として解釈できる。

①/ ˘ / 中降調：母音が短母音の促音節のときに現れるので、中域に始まり、次低域あたりまでわずかに下降する[32]か、中平調[33]のことが多い。

例：/hàk/[hāk˘32-33]「愛する」

②/ ˆ / 下降調：高域から次低域まで下降する[52]。母音が長母音か二重母音の促音節のときに現れる。

例：/hâak/[hākˆ52]「もし」

③/ ˊ / 中昇調：やや高めに始まり、次高域あるいは高域まで少し上昇する[34]～[45]。母音が長母音か二重母音、もしくは短母音の促音節のときに現れる。

例：/háak/[hākˊ34]「根」 /hák/[hākˊ34-45]「折れる」

3. 声調分岐表による声調体系

タイ(Tai)系言語において、通時的観点から声調分岐を考察するとき用いられる声調分岐表はタイ祖語 (Proto-Tai) との対応関係を表しているものである。この表は、正書法との観点からもよく用いられるもので、本稿でも下表 2 に示しておくことにする。H 類、M 類、L 類はタイ祖語における頭子音の別で、順に「無声有気音と無声の鼻音・側音・接近音」、「無声無気音」、「有声音」を示す。現在の正書法で言えば、それぞれ高子音、中子音、低子音のグループに相当する。一方の A, B, C, DL, DS はタイ祖語における声調を表し、現在の正書法で言えば、それぞれ声調記号なしの平音節、第一符号を持つ平音節、第二符号を持つ平音節、長母音の促音節、短母音の促音節に相当する。

表 2：声調分岐表

	平音節			促音節	
	A	B	C	DL	DS
H 類	⑤	①	②	②	③
M 類	④	①	③	②	③
L 類	④	①	③	③	①

声調分岐に関するビエンチャン方言との異同は次のとおりである。

- ①声調 A のとき、ビエンチャン方言とルアンパバーン方言とでは声調の分岐境界が異なる。即ち、ビエンチャン方言は H, M vs. L であるが、ルアンパバーン方言は H vs. M, L である。この点については、ルアンパバーン方言は標準タイ語と同じである。
- ②声調 A 以外の声調、すなわち声調 B, C, DL, DS のときは、ビエンチャン方言と声調の分岐境界は同じである。
- ③声調 B のとき、子音類に関係なく全て同一声調である点はビエンチャン方言と同じ

である。

④いずれの子音類も促音節 DL と DS が同じ声調ではない点はビエンチャン方言と同じである。

V. 超分節素

1. 軽声音節

基礎語彙の多くは他のタイ(Tai)系言語と同様に単音節語であるが、パーリ語・サンスクリット語からの借用語には多音節語も多い。このような多音節語のとき、語末以外の音節、即ち語頭と語中の音節では、本来の音節構造にはない「CV」という音節が出現することがある。本来の音節構造は、先の「I. 音節構造」で述べたように、母音が短母音のときには必ず末子音を伴うので、この音節はその必須である末子音を欠いていると換言できる。このときの声調は音声学的には中平調[33]で、音節全体に強勢がなく、積極的に他の声調と対立するような音調を有するとは考えにくい音節であるとみなせる。このような音節をビエンチャン方言と同様に「軽声音節」と呼ぶことにする。このような音節は筆者の資料では、母音が/a, i, u/であるときにのみ現れる。例えば次の語彙の下線部がそれに相当する。

例：/mahāawithapāalāy/[ma³³ hā:53 wi³³ t^ha³³ na:11 laj¹⁵] 「大学」

/ʔubátihêet/[ʔu³³ bat³⁴ ti³³ he:t⁵²] 「事故」

2. イントネーション

声調言語においては、音韻論的なイントネーションは慎重に取り扱うべきであると考えている。本稿では、下記の点について音声学的特徴として記述しておく。

1) 諾否疑問文

諾否疑問文のときに文末におく疑問を表す文末詞/boo/は、本来の声調と異なり、文末に向けて少し上昇する傾向がある。疑問の度合いが強いほど上昇する。

2) 声調連鎖

平叙文、あるいは多音節語のとき、語末の音節以外は一般になだらかに声調が平滑化される。とくに上昇調のとき、次の語の第一音節が高域から始まる場合を除いては上昇せず、後続する音節の声調に連鎖した高さとなる。他の声調も同様で、平叙文の文末、あるいは語末以外の音節の声調は、後続音節の声調と連鎖しているような音調である。聴覚印象的には殆ど平らである。

例：/phāapāy/[p^ha:11pai¹⁵] 「連れて行く」

VI. まとめ

以上、ルアンパバーン方言の音韻体系について音節構造、子音、母音、声調、超分節素の順に記述した。その際、必要に応じて近隣に分布するビエンチャン方言、北タイ方言、シャン語、標準タイ語との異同についても述べた。最後にビエンチャン方言との異同をまとめ、ルアンパバーン方言の位置づけを行いたい。

ビエンチャン方言との異同は以下のとおりである。

1) ビエンチャン方言と異なる点

①子音結合がある（＝北タイ方言・シャン語・標準タイ語）

②二重母音/**au**/がある（＝シャン語）。このことは現在、原則として一音一文字の表音文字であるラオ語正書法において、異なる字形を用いるにもかかわらず全て/**ay**/に合流してしまったビエンチャン方言に比べ、ルアンパバーン方言は、音価でも字形でも/**ay**/と/**au**/の対立を保持しているといえることができる。

③声調 A において、中子音と低子音の声調が同じである（＝標準タイ語）。

④鼻音には、無声化や出だしにわずかに前無声鼻音化音を伴う異音がある。このような異音の語彙は、いずれも正書法ではもともと無声音であったと類推できる高子音字で表記される語彙である。したがって、ルアンパバーン方言のこの異音は、声調分岐に伴う無声音から有声音への軌跡を示すような音である、といえることができる。

⑤有声閉鎖音は前鼻音化音や入破音として実現することが多い。これらの異音は、通時的にみた声調分岐やタイ諸語の親疎関係に関する先行研究（Chamberlain1975, 宇佐美 1998）などから、かつては音素として存在していたと思われる音である。

2) ビエンチャン方言と同じ点

①軽声音節を有する。

②高子音・中子音・低子音全ての子音の声調 B が同じである。

③声調 C において、中子音と低子音の子音の声調が同じである。

④高子音・中子音・低子音全ての子音において、促音節の長母音の声調 DL と短母音の声調 DS の声調が異なる。

⑤声調 B, C, DL, DS における声調の分岐境界が同じである。

このことからルアンパバーン方言は現時点では、上述 1) の①②③にあるように、ビエンチャン方言以外の近隣言語と一部、同じ特徴を有するものの、2) ①②③④⑤から総体的にみて「ビエンチャン方言に近い言語である」と言えるであろう。また、「ラオ語」を他の言語より弁別する最も大きな特徴である「声調 B で分裂が起きていない」という特徴を有することから、ルアンパバーン方言もビエンチャン方言と同様に「ラオ語の一種である」といえることができる。

今後の検討課題であるが、1) ④⑤や第 II 章で詳述したビエンチャン方言にはない音

声学的特徴は、いずれも通時的観点からみるとタイ祖語の諸音素や声調分岐の変化の痕跡を残していると考えられるものである。このことからビエンチャン方言よりもルアンパバーン方言の方がやや古形を保持していると言えなくもない。しかしながら、このような通時的観点からの検討については、プアン語、ラオ語サムヌア方言¹⁶など、他の近隣言語と対照させてさらに詳しく検討する必要がある。

注

- ¹ 本稿は JSPS 科学研究費 17H02331, 17K02676 の助成を受けた研究成果の一部である。
- ² 本稿の執筆にあたり、東京外国語大学教授、益子幸江先生より貴重なご教示をいただいた。心よりお礼を申し上げます。
- ³ 実質的には約 50m 東に移動しただけである。
- ⁴ ご協力に心よりお礼を申し上げます。また、1998 年にルアンパバーン県ルアンパバーン郡ムンナー村にて予備的調査を行った資料とも比較をしたが、大きな差異は見られなかった。
- ⁵ この場合の語彙は、いずれも正書法では高子音字で表記する語彙である。
- ⁶ 同じ声調の最小対立例をなす語彙がなかったので、声調のみ異なる例を挙げておく。
- ⁷ /ŋw//hw/については、単音節語の語彙がなく、確認できたのは、ここに例として挙げる二音節語 1 語のみであった。
- ⁸ 同じ声調の最小対立例をなす語彙がなかったので、声調のみ異なる例を挙げておく。
- ⁹ [ŋom11 ŋwa:i15]の第一音節[ŋom11]の声調は声調連鎖で上昇しない。後述 V. 2)-2。
- ¹⁰ シャン語の二重母音は/au/の 1 つのみが存在する。
- ¹¹ 厳密には末子音は母音が長母音・二重母音のときは任意であり、短母音のときは必須であるという違いがある。ここでは末子音がない場合を「ゼロ末子音」と記しておく。
- ¹² ラオ語の語彙として日常的に使用されるものは借用語でも「○」とした。
- ¹³ オノマトペ以外は/túa?/「うそをつく」、/nua?/「からかう」の 2 語のみである。
- ¹⁴ 1998 年のムンナー村での予備的調査では「中平調[33]」であった。今回のナービエンカム村の調査では T 氏、B 氏共に明らかに下降しており、音節末に喉頭の緊張が確認できた。
- ¹⁵ 声調連鎖で上昇しない。後述 V. 2)-2。
- ¹⁶ ラオス北西部に分布するラオ語方言。

参考文献

- 上田玲子. 1994. 「現代ラオス語ヴィエンチャン方言の音韻体系」『言語研究』第 106 号 : 95-115. 日本言語学会.
- 宇佐美洋. 1998. 「タイ諸語」新谷忠彦編『黄金の四角地帯ーシャン文化圏の歴史・言語・民族』: 27-46. アジア・アフリカ言語文化研究所・東京外国語大学

- 黒澤直道. 2009. 「ナシ（納西）語大研鎮方言の音韻体系 先行研究との比較を中心に」
『アジア・アフリカ言語文化研究』77号：63-81. アジア・アフリカ言語文化
研究所・東京外国語大学
- 新谷忠彦. 2000. 『シャン(Tay)語 音韻論と文字法』アジア・アフリカ言語文化研究所・
東京外国語大学
- 鈴木玲子. 2004. 「ラオス語」『通言語音声研究 音声概説・韻律分析』言語情報学研究
報告4：79-93. 日本言語学会.
- 西田龍雄. 2000. 『東アジア諸言語の研究 I』京都大学出版会
- 吉川利治. 1968. 『現代ラオス語の音韻組織と文字体系ータイ語との対応においてー』
大阪外国語大学タイ語研空室.
- Burusphat, Somsong. 2000. “*Phuumisart phaasaa thin. (Dialect Geography)*” Research
Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University. (in Thai)
- Brown, J. Martin. 1965. “From ancient Thai to modern dialects.” Social Science Association
Press of Thailand.
- Chamberlain, James R. 1975. “A New Look at the History and Classification of the Thai
Languages” in ‘Studies in Tai Linguistics in Honor of William J. Gedney.’ 49-66.
Central Institute of English Language Office of State Universities.
- Crisfield, Arthur G. 1978. “Sound symbolism and the expressive words of Lao.”
Ph.D. dissertation. The University of Hawaii.
- Detvongsa, Soulang. 1972. “*Khonkwua phaasaa laaw.*” Vientiane University. (in Lao)
- Osatananda, Valisa. 1997. “Tone in Vientiane Lao.” Ph.D. dissertation. University of Hawaii.
- Diller, Anthony V.N. eds. 2011. “The Tai-Kadai Languages.” Routledge
- Enfield, N.J. 2002. “How to define ‘Lao’, ‘Thai’, and ‘Isan’ language? A view from linguistic
science.” *Tai culture* 7(1): 62-67
- Enfield, N.J. 2007. “A grammar of Lao.” Mouton de Gruyter
- Edmondson, Jerold A. 1997. “Comparative Kadai: The Tai branch.” Summer Institute of
Linguistics, University of Texas
- Gedney, William J. 1995. “Southwestern Tai Dialect Studies: Glossaries, Texts, and Trans-
lations.” University of Michigan
- Kamonnawin, Varisa. 2001. “*Fuekthaksa phaasaa laaw Vientiane.*” Thammasart University. (in
Thai)
- Pankhueankhat, Rueangdet. 1988. “*Phaasaa thin trakuun Tai. (Dialects of Tai)*” Chulalongkorn
University. (in Thai)

- Pittayawat, Pittayaporn. 2009. "The Phonology of Proto-Tai." Ph.D.dissertation. Coenell University.
- Vichiankiaw, Aounrat. 1996. "The Northern Thai Dictionary." Institute of Rajabhat Chiang Mai. (in Thai)
- Watthanapraseut, Kanthima. 1998. "*Rabop siang phaasaa laaw khong loum nam thaacin.* (The Phonology of Lao dialects in Thachin River Basin)" Silpakhorn University. (in Thai)
- Xayavong, Somseng. 2012. "Watcananoukom phaasaa laaw. (Lao Dictionary)" Lao Academy of Social Sciences (*Sathanban withanyaa sangkhom haeng saat*)